

首歴環境調査等とのむすびつき。

2、性格 (Personality) の科学の問題と採用的方法、(更に現在進めつゝある研究について)

3、行動評価のための方法の確立(行動評価と場面の問題、教師・両親の観点、評定の信頼度、共通評定項目の検定の見直しなど)——表並びに参考資料略——

4、むすび

(1)については一例として本文にもふれたが更に他人関係、兄弟の位置、家族構成などもくわしくしらべてあるのでそれらとからみあわせて更に分析をすすめつつある。さしあたって分析法が有力であると研究を進めている。(2)については、拾数種のテストをもちい小学五年中学二年正常集団とし特種学級少年院を異常集団とし性格研究をすすめつつあるのではやく幼児のクロスセクショナルな問題にある見通しをたて、シーケンシャルといおうか発達段階の研究、今回のクラスターを用いての表面的な研究から源泉的な研究にすすめたい。現在三百数十のアイテム情意テストを実施し因子に分析的研究にアプローチしようとしている。(3)については指導要領の改訂にともない是非必要で資料のような観点で検訂を進めている以上、結論といつても、ままとつためばしいものもない不完全なまま報告をおえる。

## 幼児の生活発表

神田寺幼稚園

栗田成子

### 一、序に

前々から私どもの幼稚園では、幼児の言語生活を豊かにし、併せて生活指導に役立てるために、毎週月曜日の朝、前日の生活経験を級の皆に分る様に発表させることにしている。私は子供達をよりよくみつめるために、それを出来るだけ記録してきた。

昭和二八年に、一応のまとめとしてこの記録をもとに、子供達はどの様な環境に育っているか、又どんな事に興味を持っているか、どんな生活経験をしているか、その中でどんな言語表現をもっているか、どの様な文型を使用しているか等について発表した。

その時の子供達は幼稚園を卒業して小学校に進学した。私の手許には、この子供達が三才から五才までの三年間に渡って発表をした記録が残った。全員の前で自分の思つたまゝをその年齢としての適当な言葉で、その上に人によくわかる様に発表することは、民主主義の世の中では特に大切な力だと思ふ。この力は全部の子供に育て、やり度いと思ふ。私が三年間つづけて記録した二五名の子供達のうちでいつもつづけて発表する子供もあれば、三年間一度も発表をしなかつた子供もある。

全部の子供が話せる様にしたと思うのに、どの様な理由でこの様な差が出来るのか、話せない子供にはどの様な指導をしたら話せる様になるか、母親や仲のよい友達とは進んで話す事が出来るのに多勢の前で発表する時になるとだまってしまうのは何故か、その障害をとり除いて発表し易い様に仕向ける必要がある。子供達が残してくれた生活発表の記録をもとに、生活発表を進め又は阻む因子は何かという事を調べてみようと思つた。始めから研究を目標してつた記録でなく保育をやりながら、自分の受持つた子供達を良くしたいと思つた上での記録なので対象も少なく、研究型態も整わな

い誠に不十分なものではあるが、御参考に供したいと思う。

## 二、研究の手つぎ

### 1 生活発表記録の処理

はじめに述べた様に月曜日に、その前日の生活経験を自由に、みんなの前に出て発表させこれを記録した。何時も厳密に時間を定めて行ったわけではないので記録に残っているのは、三才の時十五回、四才の時六回、五才の時七回である。又毎回毎に皆の子供が必ず発表する様に配慮したでもない。この記録を日本語の基本文型をもとに一語文、二語文、三語文、四語文、五語文という様に分け一語文には1点、五語文には5点を与えて評点化した。

各年齢段階毎に平均と標準偏差を算出し、平均を中心に一シグマの範囲を中とし、上中下の三階層に分けた。三か年のものを組合せると、上上中、上中中、上中下、中中下、中下下、下下下の六つのグループになった。二五名を発表成績の順位に従ってならべると、表のようになる。

### 2 生活発表をさへると予想される諸因の調査

次に生活発表をすゝめたり阻んだりする要因には色々あると考えられるが、その時々々の偶然的な要素はさておき、恒常的に作用すると思われるものを、知能と社会的向性と家庭環境の三つに想定して、それぞれ次の様な調査をした。

3	言語発表表					知能検査			社会的向性			家庭環境			
	年	内			WISC	田中ビネー	教師	母	兄弟の平均	兄弟の順位	兄弟の偏差	兄弟の順位	兄弟の偏差		
		3才	4才	5才											
第一群 (上上中)	総合順位	3才	4才	5才	言語	知能	教師	母	兄弟の平均	兄弟の順位	兄弟の偏差	兄弟の順位	兄弟の偏差		
	A	上	上	中	8	110	145	103	64	58	15	1	中	上	
	B	上	上	上	3	115	12	115	58	58	6	1/2	1	中	上
	C	中	上	上	2	125	3	138	62	58	3	1/2	1	中	上
	D	上	中	上	4	115	12	111	62	53	5	1/2	1	中	中
第二群 (中中下)	E	上	中	上	6	143	1	152	44	57	10	1/3	1	中	中
	F	中	中	上	5	132	2	128	63	45	8	1/2	1	中	中
	G	上	中	中	11	99	21	95	37	58	12	3/8	2	上	上
	H	下	中	上	1	121	65	127	62	60	15	2/2	1	中	中
	I	上	下	中	9	107	16	94	42	50	16	1/3	1	中	中
第三群 (上中下)	J	上	上	下	19	117	9	109	55	34	18	3/4	1	中	中
	K	上	中	下	19	88	25	127	49	56	9	3/4	1	中	中
	L	上	上	中	13	118	8	129	47	37	20	1/2	1	上	上
	M	下	中	中	10	121	65	101	54	62	4	1/2	1	上	上
	N	中	中	下	19	106	17	102	37	48	19	4/4	1	中	中
第四群 (中中下)	O	中	中	下	19	115	12	133	45	49	135	4/5	1	下	下
	P	中	中	下	19	116	10	106	50		11	4/5	1	下	下
	Q	中	下	下	19	102	185	99	31		24	3/3	1	中	中
	R	下	下	下	7	102	185	121	52	65	7	6/6	1	中	中
	S	下	下	中	12	124	45	122	36	30	23	2/2	1	上	上
第五群 (中下下)	T	下	中	下	19	110	145	109	42	41	21	5/5	1	中	中
	U	下	中	下	19	95	22	115	37	56	15	1/3	1	中	中
	V	下	中	下	19	93	23	94	37	54	17	2/2	1	中	中
	W	下	下	下	19	124	45	141	37		22	1/2	1	上	上
	X	下	下	下	19	101	20	109	26	32	25	1/2	1	中	中
第六群 (下下下)	Y	下	下	下	19	90	24	103	50	44	135	1/2	1	中	中

P = 0.54      P = 0.97      P = 0.69

第一の知能については、四才の時に田中ビネー式知能検査を、五才の時にWISC知能検査を実施した。生活発表と知能の相関を列位相関法によって出す時には、まず五才の時の生活発表の順位と五才の時に実施したWISCの順位との相関によって列位を出し、次に四才の時の田中ビネー五才の時のWISCのこの二つの知能検査の平均値で列位を出してきめた。

第二の社会的向性を見るには田研式診断性向性検査を使った。実施と処理のためには田中教育研究所の御指導を頂いた。

実施の方法としては、対象が幼児であるので本人が記入する事が困難なため、一方では家庭の中でこまかく子供をみている母親が記入し他方では集団の中で生活をみている教師がそれぞれ記入する二者による他人診断法を用いた。

表でわかる様に両者の評価の間に大きくいちがいのあるものも三割近くあるがその他は似通った評価をしている。

なお、この田研式診断性向性検査は、社会的向性、思考的向性、劣等感、神経質及び感情変易性の五つのアイテムから成り立っているが、社会的向性を除く他の四つの項目は生活発表表との間に何の相関も認められないので、この五項目のうち社会的向性の数値のみを表示した。

参考までに資料を出すと、スピアマンの列位相関法による相関係数は、項目毎に次の通りである。

社会的向性	○・六九	思考的向性	○・一九
劣等感	○・二七	神経質	○・〇三
感情変易性	○・一五		

この様に偏った結果が生まれたのは何故かという点、幼児の向性度の測定法に若干の問題点があるのではないか、例えば使用した検査紙の問題場面が幼児には不適當で、とらえにくかったとか、幼児の性格がまだ不安定であるとか、他人診断法のみ頼らざるを得なかったとか、等の点で不備がある様に思う。(但し測定の信頼度の点については、この検査が標準化された時の小学校五年の基準と比較してみると、大体妥当であると言える結果を得ている。)

第三の家庭環境については、家庭における兄弟の数と位置及び生活発表出来る様な豊かな経験を留意する様な文化度ということに重点をおいて調べた。

後者については子供のために買ってある雑誌や書籍の数、おもちゃの数、それに子供本位の外出の回数等を調査した。通園区域は東京のほゞ中央で電機器具、洋服地、果物等の問屋が集まっている純然たる商業地域である。

親の職業は商店十四、問屋七、その他に医者、風呂屋、会社員、各一名となっている。親の学歴は父母のどちらかゞ大学高専卒七、両方とも中学校卒十三、どちらか一方が小学校卒業四である。だから職業においても学歴についても比較的上の方で平均化しているといっても良いと思う。教育的な意味での文化度については、この様に平均化しているので区別する意味は少いわけであろうか、一応上中下の三階層に分けてみた。これも表をこらんと下さるとわかると思う。(なおこの他に四才の時に交友調査をしてワシオグラフを作ったので考察をすゝめる上の補助資料にした。)

### 3 資料を処理する観点

以上の資料をもとに次の三点から分析と解釈をすることにした。  
(一)は生活発表成績と智能、社会的向性及び家庭環境の三者との間のそれぞれの相関関係を調べる事である。

(二)は折角三カ年の資料があるわけだからこの間言語発表に著しい変化のあった子供について比較考察をすることである。

(三)は言語発表のおくれている子供についてその主な原因をさぐる事である。

## 三、研究の結果

### 1 三要因との相関関係

最初に知能指数との相関を求めてみた。五才児の生活発表と知能指数との間の相関をスピアマンの列位相関法によって算出すると、○・五四であった。これによるとや、相関がありそうに思われたので、こゝろみに、三カ年を総合した生活発表成績と、四才児における田中ビネー、五才児におけるWISCとの中間値の間の相関を同じ方法で算出すると○・三七で余り積極的な相関は認められない。これは生活発表の三カ年の総合成績と知能指数とを対比させること

に無理があるのではないかと思う。但しこれは言語と知能との間に積極的な相関がないことを示すのでは決してないと思う。生活発表はそのまゝ、言語の発達度を示すのではなく、社会的な、あらたまった場における言語使用になり易いからである。さらにこの二五名の子供のうちIQ 一〇〇以下は僅かに三名であり、最低の者でも九三を示しているから、一般的な結論を出すには上に偏りすぎた標本群とでもいべきであろう。もしも使用された文章について倫理的な質の発展という観点から分析すれば異った結果が出たかも知れぬ。

次に社会的向性との間の相関をやはり同じ方法で求めると、これは〇・六九という数値が出てこれはかなり高い相関があるといえる。少くともこの子供達の間では一部の例外を除き、社会的向性が外向であるもの程、生活発表をやり内向であるもの程発表をしないという傾向がうかがわれる。

次に家庭環境であるが、兄弟関係における位置はこの場合生活発表との関係は殆んど見られない。長子十二名、中間に位置するもの七名、末子四名、双子一組であって中間及末子のうちそれぞれ一名は長男であることからみると、大切にされたり、甘やかされて内弁慶になり易いといわれる位置にいるものが八割近くを占めている。又兄弟の数は一人が一、二人が九、三人が六、四人が三、五人が三、六人が一、双子が一組であり、三人以下が七割を占めている。これらの事も、兄弟関係に占める位置による生活発表の差をはっきりさせない原因であるかもしれないと思う。

家庭の教育的文化度との間にも、ほとんど相関関係はみられない。然しこの点については、はっきりした結果を求める事が無理であった様である。はじめにも述べた様に、本園児の家庭の間の違いは一般の家庭の間のちがいがからみれば、ちがいは言えない程のもの

のと思う。若し農村の子供達等を比較グループにえらんだとしたら、そこにどんな結果がでた事であろうか。

以上の事から知能指数や家庭環境に特に問題がない限り、生活発表をするかしないかを大きく左右するものは社会的向性であるという事ははっきり云える様に思う。

このことは、次の著しいケースからもいえると思う。第五群のS児、第六群のW児は知能の点では、一二〇以上のを示しているのに、ほとんど生活発表をしないのは、三〇に近い内向性を示しているところに問題があると思われる。逆に知能では普通児であるAが生活発表で第一群に在るのは、外向性であるからと思う。

## 2 年齢による変化の著しい場合

図表の第三群はいずれも年齢によって変化の著しいものである。このうちに次の三つの型がある。

Ⅰ、上中下 J・K (大体、下降型知能は普通よりいくらか高く外向性とは)

Ⅱ、下中上 H (上昇型。知能も高く外向的)

Ⅲ、上下中 I・L (四才のとき一度も発表せず、いずれも向性指数低。)

## 3 生活発表のできない場合

生活発表を殆んどしない第五群第六群について見ると、知能指数には上下があるが、この間の最上位であるRを除いて向性指数ではいずれも内向的の部類に入るものばかりである。これを今少し立入って検討すると、知能指数の高いSとW(何れも一二〇以上)は、向性指数は二人とも三〇代であり、これより知能が劣るとみられるR、T、U、Xは、三年間まるで発表をしないXを除くと何れも四〇代、もっと知能の低いVとYも四〇代を示している。この分析を通じて、社会的向性の影響が大きく、内向性に知能の低さが結びつく、社会的な場での発表は殆んど出来ないという状態である。

#### 四、おわりに

研究の方法に不備な点もあったが最初の予想に反して知能よりも社会的向性の方に比重が重いという事がわかった事は、極めて小さい時から家庭のあり方と、通園する様になってからの教師のけじめと人間関係を中心にする場合の作り方によって、社会的な気おくれをとり除いて行けば、みんなの前で自分の考えをはっきり述べるといふ大切な民主的な行動を身につけてやれる様に考えられる。

## 六才臼歯をめぐる諸問題

保育医学研究会

深田 英朗

### はじめに

六才臼歯は御存知の如く普通六才児に生える第一大臼歯の別名であって、その萌出は全永久歯中もっとも早く、しかも、その容積は大臼歯中最大なため、咀嚼能率も高く、全永久歯の四五%の力を有するとも云われている。又この歯は歯列構成に於て、その規準ともなる為、古くより歯科学の方では咬合の鍵とも云われて居り、虫歯による破壊が、この歯に起る時は歯列の不正が起るのは明白な事実である。それ故、児童歯科学の立場からは、六才臼歯の保護はもっとも大きな意義を持つのである。所が戦後小児のムシバは一時極めて低下したのであるが、近年その上昇は、物凝く発育期にある児童の健康保持と云う点からも誠に恐るべき問題で、その根本的対策が

本年5月に於ける都内山崎小学校生徒の6才臼歯ムシバ

学 年	人 員	1人平均ムシバ	臼歯ムシバ数
1	131		1.0
2	189		1.8
3	229		2.4
4	171		2.5
5	144		2.8
6	171		3.0

種々検討されているのである。従来六才臼歯の保護対策は、小学校歯科衛生の中心的課題として、過去何十年もの間論議されてきたのである。所が私共の研究によると、六才臼歯の歯質の強弱を決定するのは実に乳幼児期の環境である事が明白になり、又乳歯のムシバがこの歯のムシバに強い関係を有している事が明らかになった。そこで今日、比較的ゆるがせにされている幼稚園歯科衛生の意義と云うものを私のつたない研究を通じて多少とも理解していただければ、本当に幸だと思ふ。今日学校を通じて、ゆるがせにされているが、幼稚園も決して例外ではないと思ふ。特に心と体が何時も切り離しては考えられない末分化な幼児期には科学的な健康保育の問題がより一層真剣に検討されるべきではなからうか。

### 研究方法及び成績

I 現在小学校児童はどの程度六才臼歯ムシバを持っているか先ず私は現状調査を行う意味で東京都内の山崎小学校児童合計一、〇三五名につき、三一年五月に六才臼歯ムシバの状況を調査した。その結果は表一に示す如くで一年生で既に、四本の六才臼歯の中一本がおかされている。それが六年では既に三本、つまり六才臼歯七五%がムシバであると云う事は誠に恐ろしい問題である。又この表から、特に感じられる事は一年から二年になる時、その進行速度が、一番早いと云う事である。つまり萌出後間もなく、ムシバに罹患する率が高いと云う事は、恐らく乳歯ムシバによる感染が大きい事を物語る。

II 六才臼歯と乳歯ムシバとの関係